



生徒一人ひとりが参加してつくる性教育の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学岩見沢分校 公開日: 2017-07-07 キーワード: 作成者: 中村, 末太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009345

生徒一人ひとりが参加してつくる性教育の研究

中村末太郎

Research of the Sex education, every student participates and creates

Suetaro NAKAMURA

はじめに

2001年度から2年間の三笠中学校の性教育の研究は、次の実践へ向けての新しい出発点となった。2002年度で20年目をむかえる性教育の長い教育実践は、この2年間をつけ加えることにより、一層充実した研究と実践の方向を示すことができた。

三笠中学校は、三笠市教育研究推進協議会の研究指定を受け、性教育の研究を2年次にわたって行ってきた。2001年10月26日には中間発表を、2002年11月8日には、本発表を行って研究としてのまとめを行った。私も退職後の2年間で元同僚ということから共同研究者として継続して研究にかかわることができた。昨年は、年報いわみざわ(第23号)に「三笠中学校の性教育実践とその展開－19年の実践分析から－」を発表してきた。本稿は、この2年間の研究の意義と今後の方向について、過去18年間の性教育実践の流れに沿いながら明らかにする意味からまとめたものである。

第1章は、本次研究主題にこめられた性教育研究の課題と内容が、これまでの実践の積み上げの到達点の上に設定されたものであり、これらの研究の課題解明とその過程が、次の新しい性教育の展開をもたらすものになることを明らかにする。

第2章、第3章は、本次研究主題の研究推進となった考え方や方法について述べたものである。

以上が全体の構成と関連である。

第2章は「感想文」の実践的な活用に着目して、授業改善にどう生かしたかを述べる。この方法を用いることで、ますます生徒とともに性の授業をつくっていく重要性を「生徒の参加」の視点を加えることで教師の授業観の転換が実践上の課題になってきていることに言及する。このような教師側からの課題意識の変化を「参加」をキーワードにして深めたのが第3章である。

昨年に続いて三笠中学校の性教育を発表する機会を得たが、この一連の研究は、全体として見たとき、三笠中学校の日常的な教育活動や研修活動を振り返る機会となった。本稿を準備するために、直近の五カ年の研究紀要等にふれてきたが、この数年間をとってみても、生徒の言動に大きな変化をその生徒指導の取り組みの中に見ることができる。これらの日常的な問題に機敏に対処しつつ、研修活動も推進してきたことをどう見るべきだろうかと考えた。この学校全体、運営に関わる問題にしぼって、この学校が追求してきた大切なものはなにか、学校経営にかかわることについて、あとがきにそれを深めた。

第1章 「生徒の参加」を研究主題に

1. 本次の研究主題

資料1にもとづいて、本次研究の意義と位置にふれることにする。

研究主題

「生徒一人ひとりが参加してつくる性教育」

副題「生徒の感想文から性教育の実践を検証する」(平成13年度)

副題「性教育を通して生徒一人ひとりに自分自身の生き方を見つめさせる」(平成14年度)

研究主題に示された主題文を過去五カ年にさかのぼって一覧表の中においてみると本次研究主題がこの流れにそうものであることがわかる。(資料1参照、次号に掲載)

研究主題のキーワードは「生徒一人ひとり」であり「参加」である。この二つの言葉にこめられた意味を明らかにする必要がある。

そのために、まず、三笠中学校の研修活動について取り上げることにする。その上で研究主題に込められた研究課題を明らかにする。

2. 三笠中学校の研修活動について

少なくとも10年以上は続いていると思われるが、3つの領域の各々から研究課題が設定されて、毎年しっかりと計画・実行・反省のサイクルを踏んで研究紀要にまとめられている。それが生徒指導、性教育、そして授業研究の3つの領域である。(資料1)

この3つの領域は、根底に生徒指導の実践により確められた教師間の合意をめざした生徒理解につながる様々な教育活動をたばねるものとして機能してきたように思う。これらの3つの領域の研究実践は互いに影響し合い、支えあって互いの成果を学びながら推進されてきた。

1998年度からの3年間、授業研究の研究主題「一人ひとりの良さや可能性をひき出す学習活動」の仮説のもとに「生徒の授業での自己決定をどう工夫していくか」をめざしていた。

このように生徒を視点の中心にすえながら授業研究・性教育・生徒指導を互いに関連させて研修活動を推進してきた。平成11年度の性教育の副題に「自己決定場面を…」という仮説が取り上げられているのは、その証である。性教育においても、授業研究においても「自己決定の場面」を共通に追求してきた。

3. 研究主題と3つの転換

性教育の研究主題として「誰もが取り組める性教育の授業研究」が長い間使われてきた。しかし、1999年度から「自己決定場面を取り入れた参加型の授業を目指して」がつけ加えられる。それが次年度には「参加型の授業を目指して」に受け継がれている。そして、2001年度の研究主題「生徒一人ひとりが参加して……」は、これまでの研究の流れをしっかりと受け継いでいる。

もうすこし立ち入って考察してみよう。性教育の研究主題の仮説の変化に注目してみよう。

「誰もが取り組める性教育」のめざしてきたものについて、すこしふれておく。この主題にこめられた意図は「教師誰もが参加できる授業をつくり出そう」というものであった。それは、性教育の専門家をめざすことを実践のねらいにしているのではなく、あくまでも生徒理解につながる教育活動には、すべての教職員の参加をつくり出すこと、そのような条件づくりの上に立った性教育の研究実践という意味である。すべての教職員の総力が性教育においても発揮できるように「誰もが取り組める性教育」という研究主題をかかげてきたのである。そもそも、性教育の実践へと踏み出してきた原動力は、生徒を深く理解し生徒の声により添って伸びようとする生徒への教師のかかわりを大切にす教師集団の構えを示している。このような姿勢をとらせたのは生徒たちの様々な問題行動や非行等という事態に対する教師側からの教訓から出ているのであった。このような教師側の対応は、今日においても変わることはないと考えている。それだけに、この研究主題がかかげてきた願いは意味のあるものだと今でも理解している。

この「誰もが取り組める…」の誰とは教師を意味している。従って、これまでの研究は主題に関する限りは「教師のための研究」という立場であった。これが「生徒一人ひとりが参加してつくる

性教育」に変わったのである。

第1の転換はここにある。教師のための授業や性教育ではなく、生徒のための性教育の研究をめざすということが提起されたのである。「生徒一人ひとりが参加して」とあるように生徒は性にどう学んでいくのかという生徒主体の性教育の実践を目指している。これまでの実践の積み上げの取り組みは、生徒を中心にすえた授業へと変わってきた流れを、はっきりと教師側からの意識の変化の上に、生徒主体の性教育の研究とそれを支える教師の役割とは何かという新しい視野からの研究としての宣言とも言うべきエポックをつくりだしている。

従って、第2の転換は「参加」というキーワードに示されているように、性の授業における生徒の参加をどう保障していくのかという課題として提起された。授業者主体としての一斉授業のいろいろな工夫の中から次第に授業改善の積み上げの結果「生徒が参加してつくる授業」への転換がはっきりと研究課題に取り上げられたのである。教師の側からみても、これは大きな授業観の転換ということになる。この研究の推進には、これまでの性の授業の工夫の足跡をもう一度ふりかえってみることにより、次のステップの手がかりを得るものと考えられる。

3つ目の転換。それは各学年4時間、4テーマが各学年7時間扱いに実践枠が広がったことから来る実践上の課題である。手続き的に時間の増大という量的な問題であったが、質的な問題が教師側に再び提起されたことである。量的な拡大をうながしてきた力は、これまでも何度も年度反省の中で「ゆっくり」「深く考える」実践への願いや要望が出されてきたのであった。ついに1999年度の反省の後に、翌年度(2000年度)の性の授業の実施までの半年間に各学年7時間分の指導内容をつくり出したのであった。これの実践的検証の場が2001年度から2年間の新たな教育課程の発足と重なった性教育の指導計画の樹立という課題であり、さらに「総合的な学習の時間」における性を題材とした実践へとさらに研究は広がって取り組まれたのである。

このようにたゆまなく地道に実践してきた、このわずかな教師たちの歩みを励ますものとして、生徒の授業後の感想文がある。この感想文を活用してさらに性教育の授業改善に着手したのが本次の研究の実践テーマである。この感想文の活用も生徒の参加と見ることができる。

3つの転換が込められている本次研究はこれまでふれた意味から新しい出発点をきちんと示したということができる。その出発点をしっかりと足固めした2年間であった。

4. 研究の成果と課題

研究の成果といっても、研究の評価を意味するものではなく、上に示したようにこれまでの研究と今次研究の位置づけにより、次の研究を把握するという意味である。

以下、箇条書により取り上げてみる。

ア. 各学年7時間扱いの「テーマ」と指導内容について、授業実践を通して検証し確定することができた。各学年のテーマを細かく見ていくと、4時間扱いのテーマがさらに細分化して新しいテーマとして位置づけられている部分に注目して、その学年のねらいをもっと深くとらえ直すことが必要であろう。それは、各学年毎の分析・検討と同時に性教育全体を見ていくときの中核となる概念・テーマをしっかりとつかむ作業を不可欠のものとすると思われる。それは、これまでの実践がそうであったように、生徒とつくる授業を通して探求していくことにより深められると考える。

イ. 教育課程の全体構想の中に位置づけられ、教科、道徳、特活等の各領域・分野との関連についても研究が行なわれ、この面からの性教育の指導内容の検討の視点が与えられた。

ウ. 総合的な学習の時間の活用による性教育研究の実践へと活動を広げることができたこと。これは、校内での性の授業の有効性をさらに補強するものとしての役割を明らかにした。

この時間の扱い方をめぐって今後さらに検討されるものであるが、この時間の扱いは、性教育・他の領域など教育課程全体と連動していくものであるから、全体による継続した論議と研

究が望まれる。

エ. 感想文を活用した授業改善への試みは研究紀要にある通り、十分に理解され、生かされたと見れる。

前年度の感想文の分析にもとづき、昨年の指導案の検討の上に本年度の指導案がつくられ、さらに授業後の感想文の分析により課題をさぐった。この過程を本稿もあとで取り上げている。

もう一步踏み込んで、生徒の感想文の理解と活用について、広くとらえることが求められるであろう。

オ. 「参加」の研究は、始まったばかりという意識であった。研究課題への取り組みの多い中、あまり深める余裕がなかったというのが実情であった。しかし、授業の場面での生徒の活動を工夫して参加の機会を多くする授業が見られたことは積極的な姿勢である。

今後の課題の本質的な問題は「参加」をより深くとらえて生徒がつくる性教育をどうやって一歩でも近づけていくかという問題ということができる。

その手がかりは、くり返しになるが、これまで積み上げてきた実践の中に埋もれているのではないかと私は見ている。さらに、生徒とともに実践をつくりあげる教師の姿勢とそれを教職員集団でねり上げていく力が、研究をまた新しい次元へ推進していくと信じる。

第2章 生徒の感想文とその活用

1. 感想文の見方の変遷

(1) 授業後に感想文を書く

性教育の授業では、生徒一人ひとりにワークシート「性教育ノート」(手づくり)を与えている。左側半分は、本時の内容に関わる事項を中心にして、右側半分は本時の授業の感想を書く欄になっている。(資料2) このワークシートは10年前くらいから始まったが、感想文は性教育が始まった時から現在に至るまで中断することなく続けられている。長い間、この感想文を読み続けている間に、いくつかの共通の事実に気づいた。

ア. 生徒の感想文が学年が進むごとに長くなっていくこと

イ. 授業のねらいをしっかりと受け取って、前向きに考えている姿が見えること

ウ. その結果、この活動を欠かさず続ける意義があること

このような意義が自然に理解され実行されている中から、生徒の感想文の資料としての価値をもっと有効に活用できないかという方向に問題意識が変っていった。

感想文の活用へと研究が進んでいった様子を過去に遡^{さかのぼ}ってみる。

(2) 感想文の価値に気づく

① きっかけ

性教育を始めた頃の授業は、授業者が一番困難を抱えていた。まず、授業内容をどう具体的に展開するかということだが、これには手本になるものはあっても十分に納得して使えなかった。この初期の様子を単純化していえば「授業者は如何にしてしゃべらないで授業を終えるか」という意識であった。まず飛びついたのは既存の学習教材になっているビデオを使うことであった。これは大体20分で終る。それに生徒の感想文に10分～15分。導入と整理で10分。これで1コマの授業は終了する。当然に授業者はせいぜい10分程度「話す」だけでよいことになる。

しかし、この形式は長く続かなかつた。それは、ビデオの内容が生徒の気持ちに合わなかったこと、さらにこの授業形式に授業者は満足しなかつたからである。このとき、生徒の声を聞くという感想文が役に立った。

「ビデオ」から「自主教材」へと授業は変っていく。私たちの先輩たちが性教育の授業を創る

ために、本格的に研究を始めたのはこの頃からであった。先行実践や入門書を手がかりに、その一部をコピーし、それを読みながら生徒と授業を行うという形式へと変わっていった。生徒とのやりとりを通して少しずつ授業の形になっていく。これらの取り組みから「手作り」の教材づくりが当たり前という意識が定着し、それが今日にも受け継がれている。

各学年3時間・3テーマとなつてから今日の指導案のような、他の教科と何ら変わらない内容と形式になっていく。

このように授業一つとってみても、授業を創ってきた教師側のねばり強い研修を引き出した根底に生徒の感想文があったこと、それを授業の中に無自覚的に生かしていたと思う。だから、感想文は、最初からすぐにその価値を認めて活用してきたというより、授業の創造への努力の中から次第に活用の方向へと意識がむいていった。初期の段階では、あまり自覚されていなかったように思う。

② 実践の励みに

現在においても、年度ごとに実践のまとめが行われているが、毎年授業実践の前に前年度の指導案を手がかりにして、学年ごとに検討が行われている。この時の話し合いは大変重要でいろいろな意味を持っている。初めての人にとっては学習の機会であるし、一度実践をした人は、どこをどう変えるのかのように、以前の実践の反省を踏まえた考えを検討してもらう機会ともなる。まだあるでしょう。いずれにしても、これらの話し合いの方向は生徒の現状とその理解によって指導案の内容が整理されていく。

こうして指導案は改善され実践される。この取り組みの過程は、毎年しっかりと踏襲されている。だから、今年度の生徒へは同じテーマであっても、昨年とはちがう一部改善された指導案が出来たことになる。このような手順を繰り返していくから、いつも新鮮な気持ちで立ち向うことができる。このように、教職員集団の検討でつくられた指導案に生徒はどんな気持ちで受け取るだろうか、授業中の反応も楽しみである。そして、授業後、生徒の感想文もまた「ワクワク」した期待で授業者は読むのである。

毎時間、生徒の授業後の感想文を読むことによって、時には手さぐりで不安をかかえながら一応つくった指導案であっても、しっかりと受けとめている様子を感想文の中に見たとき、安堵感と同時に大きな励ましの気持ちを授業者は持つのである。

これは、感想文を一人ひとりの思いをトータルに読んで、授業に対する検証として活用したことになる。しかし、この活用もあくまでも授業後に読む、活用するという意識でしかとらえられていないのであった。

③ 公開研究会の話し合いから

過去において、本校は外部に授業を公開してきた。毎年、教育大生が教育実習をするが仲間をつれて公開研に参加することもある。普段の授業などを参観することもあるが、当然に性教育の授業でもある。これらの出会いの中から、共通して生徒の感想文に関する意見や印象を聞くことが続いている。このようなことから、生徒の感想文の大切な意義に逆に気づかされることになる。

- ・「授業」に対する真剣さと同じくらい「感想文」がよいこと。
- ・この「感想文」をどのように活用しているのか。
- ・「感想文」から何を学んでいるか、など。

私たちは、これらの問や質問に対して意識して検討をしていないことに気づかされた。

④ 学年便りに載せる

どの学年も、授業の様子や生徒の反応をまじえながら、生徒の感想文を一人もあまさず全員、全文を学年便りに載せている。発行されるたびに、全教職員の間で話題となり一人一人の生徒の新しい発見や授業者の苦労や授業の良かった所などがもう一度交流される。学年ごとの反省とはちがった視野から自由に交流される。これは、性教育の授業が取り組まれる時期に見られるいつ

もの職員室の様子である。

このように客観的に示されることにより、授業者や授業への検証、生徒理解にとどまらずに、資料的価値としてもっと有効に活用できるのではないかと考えるようになった。

2. 感想文の活用について

(1) 感想文の読み方

これまでの実践で、体験的に行っている感想文の読み方についてふれておく。

① 感想文を「ていねい」に読む

- ・全体の文章を一つとみて生徒の最も言いたいことをつかむ。
- ・全体の文章から取り上げている内容や言葉に注目する。
- ・感想文を書かなかつたものや、書いて消した後や短いものであっても大事に扱う。

② 授業と関連づけて読む

上記の特徴を授業の流れと関連させてみる。そうすることによって、授業に対する生徒の姿勢や考えを知ることができる。授業への評価につなげることができる。

③ 生徒の生活とつなげて読む

この読み方は、生徒の感想文をもっと広くとらえるものとして生徒理解につなげることになる。性教育の授業をこえてとらえることができる。

(2) 感想文の活用方法

3つの方法に整理できた。

第1の方法は「生徒理解」としての活用

第2の方法は「授業への検証」としての活用

第3の方法は「授業改善の視点の探求」としての活用

これらについて説明する。

① 「生徒理解」として活用

ア. 一人ひとりを理解する。

- ・授業後の感想文を一人ひとりの生活や学習と重ねて理解するのに活用する。
- ・授業者などはコミュニケーションの素材として活用し、人間関係改善に役立てることができる。
- ・まわりの教師の「励まし」により本人を讃える機会が見られる。

イ. 「1年間」をふりかえる

- ・感想をならべて（授業した日数分）、その生徒の感想文から成長のあとを読みとることができる。

ウ. 「3年間」をふりかえる

- ・同様にして、毎年このような活動ができれば、成長の記録としてその都度、成長を確かめられつつ、3年間の成長を文の中から分析することができる。

② 「授業の検証」として活用

生徒の感想文の中から、共通な（類似の）キーワードを取り上げ、それを数量的に処理する。その分布状況と指導案の目標や流れに対応させることにより授業への生徒の反応をとらえることができ、授業の検証となる。この状況から、本時にかけていたもの、不十分な所を明らかにし、これを手がかりにして、指導案にもう一度立ちかえりつつ、授業の改善へつなげていく方法である。（用語的方法）

③ 「授業改善の視点の探求」としての活用

まず、感想文の中から、疑問、質問や課題にかかわるものを選び出し、それらに対して解答し

たものや課題に対応したり、対立した感想文をつけていく。このような観点から感想を読み、再構成していく。この中で示された部分から生徒が授業に対して何を印象深く受けとっていたかが見えてくる。又、当然に疑問や質問、課題に対応しない感想文については、どう位置づけるか検討する。

このような方法を用いることによって、生徒がもった疑問や質問に授業はどう答えたものであるかが生徒の感想文により検討できるものとなり、感想文の内容により授業の掘り下げの問題を見ることができるとの仮説をたてることができる方法である。疑問を生じさせた意味を検討することを通じて授業案の目標と内容へと逆にたどることにより授業改善の視点へとしほり込むことができると考えた。

②を用語的方法と名づけたが③は課題分析法と名づけた。

この課題分析法を活用するためには、教師の側に性教育の取り上げたテーマに関する深い理解がなければならない。分析と考察を可能にするテーマの核となる部分をつかむことを前提として、はじめて生徒の感想文が示した意見や考え等を分類することができる。授業の主題をいかに深くつかむか、それに関連した課題をきちんと位置づけていることにより、生徒の感想文をその観点から分類も可能となり従って、逆に生徒の感想文を出された内容ごとに分類することによって、感想文による授業が再構成される。それらを実際の指導案との比較により授業そのものを浮き彫りにすることができる。この作業を通じて指導案では気づかなかった問題を明らかにでき、そこから授業改善の手がかりを得ることができるのである。

3. 授業改善のすすめ方

(1) 授業改善の意義と方向

感想文を活用した授業改善への取り組みをうながした力は、指導時間が4時間から7時間に大幅にふえたことによる。この転換は、研究の流れとしては、各学年4時間扱いの内容を1時間を2時間の扱いに分けるという形によって当面はしのげたが、指導内容をもっと厳密に検証する必要があるとの考えがこの転換の中に出てきたのである。

このとき、三笠中学校のこれまでの性教育の基本としたことをもう一度大切にすることが求められた。

それは2つある。

1つは、「生殖の性」とともに「コミュニケーションとしての性」を充実させること。それは「性交」を基本にすえながらも、生徒の現状分析の上から導かれた人間関係論としての男女のかかわりを考えさせるという視点をどう具体化するかということである。

2つ目は「子どもが学ぶ」という立場をどう授業の場面で工夫するかという授業論の問題を内包していたのであった。

このような基本をふまえつつ、7時間の授業の内容をつくっていくかということに合わせて生徒の参加としての「感想文の活用」はできないかということから改善の視点を感想文にもとめたのであった。

そのような考えのもとに感想文の活用のアイデアが生まれたのである。これととも、長い実践を継続してきたことが根底にあって、感想文の価値への着目がそれに合流したように思える。

生徒の感想文の活用の仕方が循環型へと転換したことが、これまでの活用と異なる。これまでは、授業後の反省としての活用という使い方であった。本次研究における感想文の活用は、本時の指導案をつくる際に昨年の生徒の感想文を、課題分析法により明らかにした問題をふまえ、さらに学級の実態分析による生徒の現状、生徒理解をよりあわせて、昨年度の指導案の検討が行なわれる。その結果、指導案の書き換えという作業を伴う授業の改善をめざす修正指導案を用いて授業を行う。そして得た生徒の感想文を課題分析法により見直しを行うことにより一定の結論をまとめとして残

す。次年度の実践は、授業後の反省としての改善の視点を踏まえてというように実践が受け継がれていく。

授業の改善の流れを3つのポイントに整理できる。

第一段階「感想文」の活用

昨年度の「生徒の感想文」の分析を出発点にして今年度の実践の指導案づくりを行うこと。

第二段階「生徒中心の授業」

指導案作成については、生徒を中心にすえた授業をどうつくるかという視点からの授業改善や工夫をすること。

第三段階「検証」

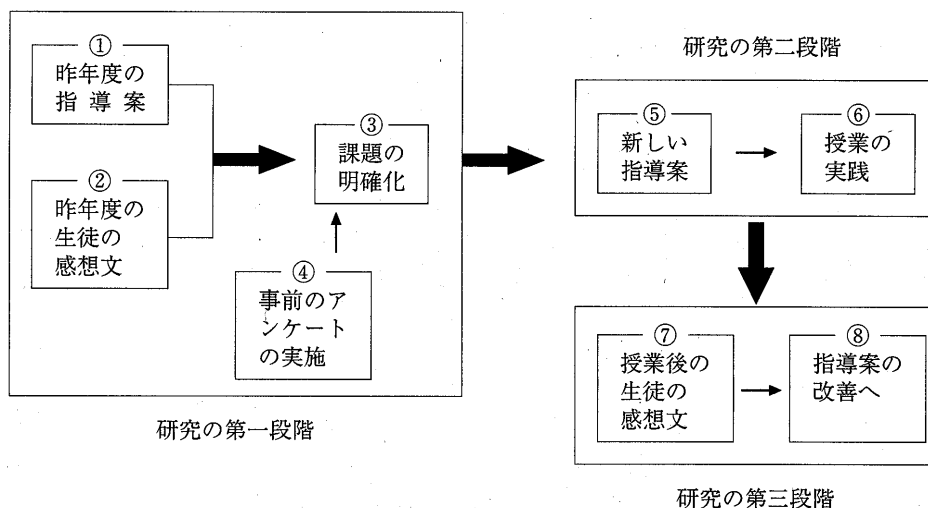
第一段階において仮定された授業案は、第二段階で、より目標に近づけることができたのかの検証とそのときにでてきた課題を明らかにすることである。このように生徒の感想文の分析を2回生かすことにより、より生徒の目線に近いところからの授業の創造をめざす。

(2) 授業改善の手順

これまで述べてきたことをくり返しにならないように箇条書にする。

- ① 昨年度、実践された指導案・反省事項を学年部会で確認する。
- ② 昨年度の生徒の感想を読み返す。
課題分析法の活用もする。
- ③ 授業を構築する上での課題を明確化する。
- ④ 必要に応じて事前にアンケートの実施。
- ⑤ 指導案に改善を加える。
- ⑥ 授業を実践する。
- ⑦ 授業後、生徒の書いた感想文を分析する。
- ⑧ 指導案の改善の検討を行う。

以上を図示すると次のようになる。



性教育授業改善の手順

まとめにかえて

2001年度からの2年間の研究は、三笠中学校の性教育の実践研究にとって大きな転換の時であった。それは、これまでの研究の総括と到達点の上に立って新しい方向と内容を確定することができ

たからである。

この転換点の中心点は「生徒の参加による性教育の創造」という方向を示したことである。長い間「誰もができる」という教師のためという課題を受け継いできていたが、今回を機会に「生徒一人ひとりが参加してつくる性教育」の立場を鮮明にしたのである。この立場からの研究の内容がそれを保証しているといえる。具体的には感想文の活用、授業論の新しい模索ということを取り上げているが、その成果を確認することができる。

第1章と第2章は、今次研究の半分をのべている。生徒の参加という実践改善の視点を持つことによって、性教育実践の始まりの頃から取り組まれている感想文が十分な価値を持って私たちの研究に寄与するものだったことに驚くと同時に、長く続けてきた中で私たちが発見した喜びをもつものである。感想文の活用もそれ自身が参加と見ることができる。生徒の参加を私たちはあまり意識しないでつづけてきたのであった。このように今回設定した1つの仮説「生徒の参加」をすえることによって、これまでの性教育の実践の見直しが新鮮な感覚でふりかえることができたのも大きい発見であった。

紙数の関係で、第2章、4課題改善の視点の探求の実際例について、第3章、第4章などは、次号に発表する。(生徒指導論) (続)